

サウスウェル "Christ's bloody sweat" における Sacramental Body (2)

Sacramental Body in Southwell's "Christ's bloody sweat" (2)

森 ゆかり
Yukari MORI

Abstract In Part II of this essay, I will discuss Southwell's perilous mission activities. He experienced house searches and long confinements before his own arrest and tortures. The pains inflicted by the Elizabethan authorities are also the pains of the Pelican and the Phoenix in his poem, "Christ's bloody sweat." In contrast with the Protestant theology of pain by the Japanese theologian, Kitamori, the collective body as well as the individual body of the Catholic faithful can be transmuted to "the body of Christ" both through the Roman Catholic Mass and through their martyrdom.

IV. 英国宣教における「神の痛み」

サウスウェルは、イエズス会入会以来の念願であった英国宣教の命を受け、ガーネットと共に10年ぶりに帰国する。Nuttallの統計によると、エリザベス1世の暗殺とカトリック体制の復活を策したバビントン陰謀事件(1586年)、翌年のメアリ・スチュアート処刑、1588年のスペイン無敵艦隊敗退を経て、1591年までの時期に、カトリック殉教者を最も多く出したという。具体的な数字を挙げると、1588年に31名、1591年に15名と、1586年から1591年までの間に総計86名のカトリックが処刑された。¹

これは丁度、サウスウェルが英国宣教活動をしていた6年間と重なる。10年ぶりの帰国で、英語能力もまだまだ十分でなく、²英国事情にもさほど明るくない彼は、当初、日常会話の話題にも困ったという。³サウスウェルには、英国宣教当初から裏切りと死の影がつきまとう。

当時ローマ英国学寮では、イエズス会の厳しい規律のため、⁴オックスフォードの自由な雰囲気慣れた

学生にとって苦痛が大きく、学寮内のイエズス会入会志願者を優遇するなどの不満の種がくすぶっており、⁵不満は特にサウスウェルが責任者を務めていたイエズス会の信心会、the Solidarity of the Blessed Virginに⁶集中していた。既に学寮を離れていたOwen Lewisは、これら学寮内の不満分子と共に、英国政府のFrancis Walsinghamと結託し、大陸におけるカトリック勢力の動向を英国に流していたのである。⁷ローマ英国学寮には、英国のスパイも侵入しており、このうちの一人で後に作家となるAnthony Mundayは、ローマ英国学寮の生活を*The English Romayne Life* に書いている。

さて、このように外からの敵と内からの敵に取り囲まれていたサウスウェルは、1586年7月7日 (O.S.) 聖トマス・ベケットの祝日に英国に上陸、⁸その2日後の早朝、初めてロンドンに足を踏み入れたサウスウェルが曙の光で最初に見たのは、ロンドン橋に晒された処刑者の首だったという。⁹サウスウェルの英国到着は、学寮運営をめぐる反発分子のスパイを通じて既にエリザベスの側近、ウォルシンガムの知るところとなっていたというのであるから、¹⁰サウスウェルがどんな危険に身を投じたのか、推察できよう。

このように英国政府まで巻き込んだ策謀の網をくぐりつつ送る宣教生活は、故国を長く離れ、言葉の不自由さをかかえたサウスウェルにとって、「生きながらの死」とも感じられたに違いない。サウスウェルの長編詩『聖ペトロの嘆き』には、以下のようなスタンザがある。

Ah life the maze of coutlesse straying wayes,
Open to erring steps, and strow'd with baites,
To winde weake senses into endlesse strayes,
Aloofe from vertues rough unbeaten straightes.
A flower, a play, a blast, a shade, a dreame;
A living death, a never turning streame.¹¹

ロンドンにはカトリック地下組織の拠点が幾つか点在しており、¹²夜間に人目を忍んで司牧活動をしていたサウスウェルは、文字どおり尾行に追跡されてロンドンを這回することもあった筈である。このスタンザに見られる「迷路」のイメージには、サウスウェルの実体験の片鱗がのぞいているように思われる。詩編第5章9節にある「主よ、恵みの御業のうちに、わたしを導き、まっすぐにあなたの道を歩ませて下さい」という、サウスウェルの祈りが聞こえてくるようだ。「彼らの口は正しいことを語らず、舌は滑らかで、喉は開いた墓、腹は滅びの淵」(同5章10節)だからである。

さて話を元に戻そう。入国後まだ1箇月もたたない1586年8月には、前述のパピントン陰謀事件が発覚する。国内カトリックへの弾圧が強化される中、サウスウェルは、イエズス会総長アクアヴィーヴァへ、既に英国で宣教活動をしていた先輩のイエズス会士で、入国後は、国内カトリックの活動方法等をサウスウェルに指導していたWilliam Westonが同8月に逮捕された¹³ことを知らせている。書簡中、同様の危険が国内の他の宣教司祭達にも及んでおり、彼とて例外でなかったことを以下の様に記す。事件が起きたのは、同年11月14日早朝、Lord Vauxの館でサウスウェルがミサを挙げている時、家宅捜索に遭遇したのである。¹⁴

Twice I was in extreme danger. The
pursuivants were raging all around, and
seeking me in the very house where I was
lodged. I heard them threatening and breaking

woodwork and sounding the walls to find
hiding places; yet, by God's goodness, after
four hours' search they found me not, though
separated from them only by a thin partition
rather than a wall. Of a truth the house was in
such sort watched for many nights together
that I perforce slept in my clothes in a very
strait, uncomfortable place. In this wise, while
we are yet free, we are trained to bear
confinement. Yet in the midst of perils it is
marvellous how good God is, and how
bountiful of His comforts, insomuch that
danger itself groweth sweet.¹⁵

カトリックの屋敷を家宅捜索する官憲は、司祭やミサの祭具が隠されている場所を探す際、家具を引き倒し、壁紙を引き裂いたり、内壁を破壊などして、構造物の内側に隠された空間は無いか、邸内を隈なく捜索する。嵐のように来襲してきた官憲が荒々しく叩く壁の音が聞こえてくる生々しい描写だが、『聖ペトロの嘆き』の以下のスタンザに描かれた、身体を這い上がる戦慄的な死の恐怖は、priest-holeに隠れたサウスウェルにも経験されたに違いない。

Ah, whither was forgotten love exiled?
Where did the trueth of pledged promise
sleepe?
What in my thoughtes begat this ongly childe,
That could through rented soule thus fiercely
creepe?
O viper fear, their death by whome thou livest,
All good thy ruynes wrecke, all evels thou
givest.¹⁶

このように既に拘留されているウェストンの苦しみ、サウスウェルはまだ自由の身にあつて知った訳だが、サウスウェルが家宅捜索で経験した痛みはこれだけではない。彼は次第に英国カトリック共同体と共に痛むことを知っていく。上述のアクアヴィーヴァ宛て書簡の続きを引用しよう。

They have taken not only priests in great
number, but also certain noble ladies with their
servants and maids, and committed them to

prison. The time that I was sought for they led off two of the servants; one of whom, because he would not attend the conventicles of the heretics, they cruelly beat and forced him by day with great toil to turn the treadmill along with vagabonds and the like, and to lie at night on the ground, without bed, mattress or coverlet; neither could he obtain that food or bed or clothes should be supplied him by his friends. After this sort is he afflicted even to this day, by whose means I have escaped.¹⁷

幾日にも及ぶ捜索にもかかわらず、司祭やカトリック礼拝の証拠が見つからない場合には、屋敷の使用人を拘引して、拷問等の手段を使い司祭の所在を尋問するのは当時よくあったことらしい。吉田も指摘するように『聖ペトロの嘆き』の以下のスタンザには、語り手が身の危険を切迫に感じていたことが表れているという。¹⁸ 引用部分の前半には、弟子たちとの最後の晩餐の後、イエスがペトロの離反を予告する場面で、ペトロが自らの信仰を告白する「主よ、御一緒なら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」(ルカ22: 33)や、「あなたのためなら命を捨てます」(ヨハネ13: 37)が残響しており、これらはそのまま、サウスウェルの独白ともなっている。イエズス会修練時代から、英国宣教を望み、殉教をも嫌わない覚悟であったサウスウェルにとって、自らが追手を逃れた代償に、体に障害を残して戻ってきた使用人の痛ましい姿は、ペトロの裏切りにも等しいものと思われたに違いない。

The borne-blind beggar for received sight,
Fast in his faith and love, to *Christ* remain'd:
He stouped to no feare, he fear'd no might:
No change, his choyce: no threatens his truth
distain'd.
One wonder wrought him in his duety sure:
I after thousands, did my Lord abjure.
.....
Die: Die: disloyall wretch thy life detest:
For saving thine, thou hast forsworne the best.

Ah life, sweete *drop*, drwond up a sea of
sowers,

A flying good, posting to doubtfull end.¹⁹

第83行の、"Die: Die"で始まる[d]音の頭韻は、臍腑に響くような重く、不気味なリズムを構成し、カトリックの屋敷を急襲する官憲がたたき壁の音や、刑吏が振り下ろす鈍器のように切迫した音がする。こうした死のイメージが続かなか、生きることへの渴望を象徴²⁰するような卑の一瞬のきらめきに、まだ20代のサウスウェルの若い命の輝きが反映していて痛ましい。

サウスウェルは、このように官憲の張り巡らす網をくぐって、ロンドン周辺のカトリックのために、ミサや告解などの司牧活動を続ける他、処刑されるカトリックに最期の許しの秘跡を与えるために、人ごみをかき分けて処刑場に赴いたという。²¹ こうして十代の頃から伝え聞き、黙想し続けた殉教の残酷さを彼は繰り返し目撃することになるのである。

さて、1588年スペイン無敵艦隊敗退の後、大規模なカトリック処刑が行われる。一年間に31名もの殉教者を出したことは既に述べたが、サウスウェルも記しているように、敵国スペインへの憎悪が国内カトリックに向けられることになったのだ。²² 当時の模様については、各地の港が封鎖されている上、こうした記録を自宅に保管しておく危険性のために、残っている記録は断片的なものだというが、²³ 処刑された司祭や信者の中には、サウスウェルと共に活動した同志が沢山いた筈である。²⁴ 教皇の国王廃位権や、教皇軍が侵攻してきた場合には、どちら側に味方するのかという、"Bloody Questions"²⁵について、拷問を使った取り調べが益々強化されることになる。

更に1590年4月6日、長年エリザベスの側近であったウォルシンガムが没すると、急速に台頭してきたのが、Richard Topcliffeであり、約6年の間、独裁的権力を行使する。ウォルシンガムと並びエリザベス政権を支えてきたセシルは、長老主義の台頭を恐れる女王が、最も嫌っていたピューリタンの傾向を持っていたがために、宗教政策に関して、女王は誰も信頼できる協力者がいなかったからである。²⁶ トップクリフは、Bridewell監獄を中心に、カトリック司祭、信徒に対して、国家安寧を脅かす政治犯に対して従来使用されてきたものより残酷な拷問を考案して、カトリック弾圧はここに、その苛酷さを極めたのである。²⁷

サウスウェルもトップクリフの拷問がいかに苛酷な

ものかをよく伝え聞いていたようである。アクアヴィーヴァ宛ての書簡中、1590年3月4日に殉教したカトリック司祭、Christopher Baylesについて報告する際、トップクリフの拷問を説明しているからである。どんな尋問にも自分がカトリック司祭であり、キリストの囲いに魂を呼び戻すために渡英したのであって、ほかのどんな意図も持っていないとしか、答えなかったと記している。²⁸アクアヴィーヴァに宛てた同書簡では、この司祭と同じ日に処刑された殉教者の血に"dew"という言葉を使っている点注目したい。

Then the hangman, with hands all bloody with this butchery and quartering, hastens to another street [Smithfield], to execute a layman, a man of probity, who had ben condemned to die for comforting priests, and giving them alms. ... Horner was the man's name; and he gained the palm of victory with as great constancy as the other. With these *spring-showers*, as it were, the field of the Church was to be watered, that the tender plant might rejoice in such *dew*-drops. ²⁹

"Christ's bloody sweat"第1スタンザで描写された「自然」の恵みの雫は、先程引用した『聖ペトロの嘆き』で、サウスウェルの切なく若い命の輝きを映し出すばかりでなく、ここに見られるように、殉教者の血の雫をも象徴する。「苦しみ、犠牲、死がすべて天にまかれる種」³⁰であるとすれば、地の面を濡らす春の優しい雨は、無垢で柔らかい復活の命を育む。この雫はまた、鶏の鳴くのを聞いて、イエスの悲しみと慈しみに触れたペテロの改悛の涙であり、「望みなきまでに破れ果てた」³¹この世の痛みを包む神の「恩恵」の雫でもある。

さて、迫害はその手を休めることがない。1591年10月、各州、各都市、各港にカトリックを取り締まるCommissionerを設置するという内容のProclamationが發布される。³²これを受けたサウスウェルは、*An Humble Supplication to Her Maiestie*を執筆するが、同パンフレット中、カトリックに対して使用された拷問の描写が含まれていたために、トップクリフの捜索はいよいよ最終段階を迎えることになる。サウスウェルは、冒頭、女王に対する呼びかけの後、訴えの客観性を損なわないよう

人称代名詞の"they"を使って同胞カトリックが忍んでいる迫害を列挙し、カトリック弾圧を黙認する女王に今度は直接、"your Maiesties"と二人称を使って問いかける。彼女こそが、"the only shoot-anker of our last hopes"であると、カトリック共同体としての「我々」の嘆願を始めるのである。³³

... because without vntruth or Iniury we cannot answere, we are soe vnmercifully tormented, ... and when the soule, weary of soe painful an harbour, is ready to depart, they apply Cruell Comforts, and reviuie vs, only to *Martyr vs more deaths*; ... Some are whipped naked soe long and with such excesse, ... Some, besides their tortures, haue bene forced to lie continually booted and Cloathed many weekes together, pined in their diett, Consumed with vermyne, and almost stifeled with stench.

Some haue bene watched and kept from sleepe, till they were past the vse of reason, and then examined vpon the advantage, when they could scarcely giue accompt of their owne names. ... Divers haue bene throwne into vnsavourie and dark dungeons, and brought soe neere starvinge, that some for famine haue licked the very moisture of the walls;³⁴

厳しい拷問で苦痛に満ちた身体が魂が離れるかと思った瞬間に、刑吏はその手を休め、カトリックは生きながらの殉教を繰り返す。当時収監されていたカトリック司祭、信徒の惨状については、McGrathとRoweの研究が詳しいが、獄中で餓死したり、囚人の排せつ物の悪臭や悪疫で死亡した者もいた。³⁵サウスウェルのこの記述は、当時の記録からもその信憑性を確認することができるが、彼の指摘通り、拷問による取り調べで得られた自白の事実性もさることながら、拷問自体が被疑者に罪状を自白させる目的というよりは、情報収集の目的で使用されたため、³⁶当局者の推論次第で、どんなに歪んだ結論をも導き出され得るとなれば、狭いカトリック共同体で、友人が友人を、肉親が肉親を告発するという悲劇が繰り返されることにもなるのである。³⁷こうした共同体の「痛み」について、『神の痛みの神学』の著者である、北森嘉蔵は以下のように述べる。

痛みの中にある隣人に対して我々が自己の痛みと同じ切実さをもつて愛を注ぎ得るのは、その隣人と我々自身とを共に含めて神の痛みの中に措定する時である。則ち「キリストに於ける一つの体」(エペソ書3.6参照)となる時である。... 痛める隣人が神の痛みの中に含まれており、我々もまた神の痛みの中に含まれておるが故に、神の痛みにおいて隣人と我々は一つに連なり、隣人の痛みは我々自身の痛みと同様の切実さをもつて感じ得られるのである。³⁸

サウスウェルもまた神の痛みの中に含まれているが故に、神の痛みにおいてカトリック同胞と彼は一つに連なり、彼等の痛みは彼自身の痛みと同様の切実さをもつて感じ得られるのである。当時のイェズス会は、女王に対して"sacred"という形容詞を使うことを禁止しているにもかかわらず、嘆願中、サウスウェルはこれを6回も使用して、大陸カトリックの強硬な論調とは異なる響きを持たせているのは、³⁹外圧により迫害が益々悪化していることを、身をもつて経験している彼にとって、大陸カトリックとはまた違った視点で、同胞の痛みの切実さを感じていたからではないだろうか。隣人と彼自身の痛みを共に捧げて、引き裂かれた世界を自らの痛みで包む神に委ねていたのである。「神の痛み」が現実の痛みに内在的となっている⁴⁰ことを知っている人、サウスウェルは更に、このように引き裂かれた世界の原因を以下のように述べる。ここで現れる無辜の民の血もまた、"Christ's bloody sweat"の第2スタンザのペリカンのイメージと共通しており、当該詩のペリカンは、受難のキリストを象徴すると同時に、迫害され殉教するカトリックをも表していることが分る。

It is not possible to expresse in words *the continuall hell we suffer by the merciles searching and storming of Pursevants and such needy Officers, that Care not by whose fall they rise, not having any deserts or other degrees to Clymbe to the height of their Ambition, but the punishments and paines of poore Catholiques. They water their fortunes with the showers of our tenderest vaines, and build their howses with the ruynes of ours,*

tempering the mortar of their foundations with *our Innocent blood. They ... by displanting of our offspring adopt themselues to be heires of our Lands, And not contented with our wealth, they prosecute our lives, neuer thinking their possession sure, till th'assurance be sealed with our death:*⁴¹

エリザベスがプロテスタント国教体制を確立して以来、自宅に司祭を匿まい、ミサを中心に屋敷の使用人等を含めたカトリックの小共同体を維持していたのは、ジェントリー以上の富裕層であったために、これら家族の財産をrecusancy(国教忌避)のかどで没収することで生計をたてる、トップクリフをはじめとする"pursuivants"やスパイが沢山存在した。彼等は人格の点でも、才能の点でもそれにふさわしいものを持たず、他人を破滅に陥れて、野心の梯子で権力の座に這い上がろうとする。これはサウスウェルの実家の没落をはじめ、彼の逮捕をめぐるカトリック一族の悲劇の原因ともなり、サウスウェルも共同体の痛みの中へ、否応無しに引きずりこまれてゆく。

さて、こういった有力カトリックのうちに改宗したBellamy家があったが、この家の娘、Anneは、Bridewellの独房に監禁されていた折、トップリフに強姦、妊娠させられる。⁴²家族の安全を条件に、彼女はサウスウェルを裏切り、トップクリフに引き渡す工作に協力するが、この約束は守られず、彼女はトップクリフの部下であったNicholas Jonesと結婚させられて、この男がベラミーの家督を継ぐことになる。⁴³*Humble Supplication*で描かれた悲劇がそのままの形でベラミー家を襲ったことになるのだ。後の公判で、唯一証言台に立ってサウスウェルを告発することになるアン⁴⁴は、アンと彼女の家族を守るために、自分が司祭であること、そして自分の名前さえ明かさずにトップクリフの拷問に耐えた⁴⁵この司祭の瞳の奥に、人間の罪のために「望みなきまでに破れ果て」た世界の痛みを包む、キリストのまなざしが映っているのを見なかっただろうか。

V. キリストに倣いて

*Humble Supplication*の執筆後、アンの手引きでベラミー家を訪問した際、サウスウェルはついに当局

に逮捕される。1592年6月26日(O.S.)のことである。⁴⁶トプクリフの自宅で拷問された後、Gatehouse監獄に、⁴⁷1592年7月25日(O.S.)には、ロンドン塔へ移されて、以後約3年間独房に収監されることになる。⁴⁸以下は拷問による尋問内容であるが、既に述べた様に、サウスウェルは、自分が逮捕された屋敷の主、ペラミー一族の安全のために黙秘を通し、自分の名前さえ明かさない。入国前の立法で司祭を匿った信徒にも重罪が科せられていたからである。拷問による自白から引き出す歪曲された推論がどのような結果をもたらすのかよく知っていた彼は、セントポールに行ったことがあるかどうか、などといった質問にさえ、答えなかったという。当時英国宣教の情報拠点として活動していたRichard Versteganがサウスウェルについて報告する書簡から引用してみよう。ここでもアレンが糾弾してやまない、推論を勝手に積み上げて犯罪を捏造しようとする当局の恐ろしさが伝えられている。

... there [at Topclif's own house in Westminster] he hath exceedingly tormented him at four several times, ... demanding of him whether he were not a Jesuit & whether his name were not Southwell, whether he were not employed there for the Pope and King of Spain. The Father refused to answer to any thing, saying that if he should tell them anything at all, yet would they not leaue to torment him to know more: yea to know more than himself did know. Whereupon one of the examiner did ask him whether he would confess yf ever he had been to Pauls. The Father answered that he would not confesse that neither, because he could confesse nothing unto them but *they would still infer further matter upon it*, and seek to get from him more than he knew.⁴⁹

3度の否認の後、復活のキリストに出逢ったペテロが、キリストへの愛を信仰告白した際、「私の羊を飼いなさい」(ヨハネ21:17)と牧者としての務めを委ねられているのと同様に、サウスウェルもこの務めに忠実に黙秘を続け、望みなきまでに破れ果てた世界の「痛み」を包む神の愛を証しする。ヨハネ同箇所

はすぐ次に、ペテロの殉教を予告しているが、サウスウェルもまた委ねられた牧者の務めを果たした上は、神の愛に殉教することが要求されるのを知っていたらう。このように頑なに黙秘するサウスウェルに対しトプクリフの拷問はますます残酷になっていく。次に引用するのは、公判の際に明らかになった、拷問使用をめぐるサウスウェルの糾弾と、トプクリフの言い逃れである。F.Sはサウスウェル、Toplifはトプクリフの供述である。

F.S.: "I am decayed in memorie with long and close imprisonment, and I haue bene tortured ten times. I had rather haue indured ten executions. I speak not this for my self, but for others; that they may not be handled so inhumanelie, to driue men to desperation, if it weir possible."

Toplif: "If he weir rackt, let me die for it."

F.S.: "No: but it was as evill a Torture, of late devise."

Toplif: "I did but set him against a wall."⁵⁰

Humble Supplication で彼が"Martyr vs more deaths"と表現した、極限にまで引き伸ばされ繰り返される拷問のため、サウスウェルは記憶力まで衰えたと言うが、彼の受けた拷問は、キリストの十字架刑と本質的に同じ苦痛であるという。⁵¹1594年春に逮捕され、同年4月にロンドン塔に移送されたイエズス会士で、サウスウェルの親友でもあったJohn Gerardは、彼と同じ拷問を受けたが、10月に脱走、後年その体験を書き残している。

But I could hardly utter the words, such a gripping pain came over me. It was worst in my chest and belly, my hands and arms. All the blood in my body seemed to rush up into my arms and hands and I thought that blood was oozing out from the ends of my fingers and the pores of my skin. ... The pain was so intense that I thought I could not possibly endure it. Seeing my agony and the struggle going on in my mind, He gave me this most merciful thought: the utmost and worst they can do to you is to kill you, and you have often

wanted to give your life for your Lord God. The Lord God sees all you are enduring - He can do all things. You are in God's keeping. With these thoughts, God in His infinite goodness and mercy gave me the grace of resignation, and, with a desire to die and a hope (I admit) that I would, I offered Him myself to do with me as He wished. From that moment the conflict in my soul ceased, and even the physical pain seemed much more bearable than before, though I am sure it must, in fact, have been greater with the growing strain and weariness of my body.⁵²

これは正に、"Christ's bloody sweat"第2スタンザで描写された不死鳥の"fiery paines"であると言ってよい。またある時、業を煮やしたトップクリフは、この拷問にさらに激しい苦痛を加えたために、サウスウェルは内臓損傷のために大量吐血し、⁵³以後、大きな声を上げられなくなったという。⁵⁴ペリカンの苦しみである。こうして、サウスウェルの身体の上にも、不死鳥とペリカンの痛みが結び付けられて、あとは聖霊の愛の火で「積み薪」が燃え上がり、木と石の肉体を焼き尽くすばかりである。ウィリアム・セシルの息子、Robert Cecilは、サウスウェルの拷問を目撃した一人であるが、彼の様子が"as dump as a tree trunk"⁵⁵であったと語っている。これを伝えるガーネットには、メアリ・スチュアートの処刑後執筆した"Decease release"の一節が、獄中に横たわるサウスウェルの身体に重なって見えたに違いない。

THE pounded spice both tast and sent doth please,
In fading smoke the force doth incense shewe,
The perisht kernell springeth with encrease,
The *lopped tree* doth best and soones growe.

Gods spice I was and pounding was my due,
In fading breath my incense savored best,
Death was the meane my kymell to renewe,
By loppinge shott I upp to heavenly rest.⁵⁶

ガラテヤ第2章には、「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きてるのは、もはや

わたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」(19-20節)とあるが、獄中で自分の汚物にまみれ、切り倒された幹のように横たわるサウスウェルに、この聖書の言葉がそのまま当てはまる。だが、どうして、このように過酷な運命を課す神に、愛されると確信することができるのだろうか。サウスウェルの引き裂かれた身体と魂を支えたキリストの愛とは一体何なのだろうか、我々は思わずにはいられない。

強烈な痛みは、苦しむ人から、過去も未来も抹殺する。今この瞬間の苦痛が、その人にとっての全てであり、強烈な痛みとともに、その人を「現在」に閉じ込めてしまう。サウスウェルのいう"the continual hell"とは、無限に連続した「現在」であって、痛み自身の無意味さとともに、その人を徹底的な隷属に落としめてしまう。しかし、と北森は以下のように述べる。

我々の痛みは、神の痛みに奉仕する時、かえって真実に癒されるのである。主のためにおのが十字架を負い主のために己が生命を失う者に対して、己が生命を得べきことを主は約束し給うた。... 我々人間の痛みはそれ自体としては単なる闇であり無意義であり非生産的である。... 即ち神は彼御自身の痛みへの証として我々の痛みをば奉仕せしめんとし給もうたのである。神が彼御自身の痛みを我々人間に伝え示そうとし給もう時には、彼は我々の人間の痛みを通さずしてはこれを示したまわないのである。神は彼御自身の痛みへの証として我々の痛みを用い給うのである。... 我々の痛みが神の痛みへの証として奉仕するに至る時、我々の痛みは光に化せしめられ、意義を獲得し、生産的となるのである。... 神の痛みが我々の痛みを癒す時、それは既に痛み領域を突破せる愛、即ち「神の痛みに基礎づけられし愛」である。... 人間の世界に起こる一切の痛みは、それが神の痛みに奉仕するものとならない限り、無意味にして実りなきものである。⁵⁷

闇であり無意義であり非生産的な痛み領域が、我々を「現在」に閉じ込める時、「神の痛みに基礎づけ

られた愛」のみがこの現在を突き破り、神の「永遠」の領域に我々を招き入れる。痛みの中に「神の愛」を感じるができるのは、罪で損なわれてしまった人間に対する愛のために、キリストが自らの身体性をもって、痛みの極限までもを経験し、最も無意味な死や痛みにさえ、新しい意義を与えることができたのを知っているからである。

カトリック・ミサに於ける実体変化を否定する北森の『神の痛みの神学』は、痛みを担う身体性の点で、サウスウェルのカトリック信仰と相違する。しかしいずれも「神の痛み」に奉仕する人間の原型として、創世記第22章のアブラハムによるイサクの犠牲に言及している点が共通している。サウスウェルに於いては、痛みを捧げる人間の身体性と、受難のキリストの身体性が、聖変化をうけたパンとぶどう酒に現存する、「キリストの体」を介して、直接一致するのである。

ロンドン塔移ってからのサウスウェルは、それ以降は拷問を受けなかったというが、1593年4月、獄中からロバート・セシルに宛てた絶筆の書簡には、いつ襲ってくるかもしれない拷問の恐怖がいかにも彼を苛いんだかを物語っている。

And though my body trembled and my tears
bewrayed grief through the horror and
expectation of my painful agonies (a thing
incident unto Christ himself) yet as I hope it
will ever prove, no force enforced me to the
least offense.⁵⁸

ベラミー一族が既に獄中にあることを知ったサウスウェルは、もはや自分の身分を隠す必要もなくなり、カトリック司祭であることを明らかにして、一刻も早い処刑を望む。"a short reprieve were but a longer martyrdom"⁵⁹であるからである。度重なる拷問とその恐怖に苛まれる獄中生活は"Christ's bloody sweat"の再現に他ならず、丁度アブラハムが息子イサクを、犠牲として捧げる「積み薪」としたように、サウスウェルもまた、拷問で木の幹や石のように麻痺した身体を「神の痛み」に奉仕させ、自らを「焼き尽くす捧げもの」として奉獻する。獄中生活において彼の脳裏にあったのは、自らが書いた詩"Christ's bloody sweat"だったのかもしれない。トップクリフの拷問に耐えた後、サウスウェルが唯一書き残した

当書簡と、この詩を繋ぐのは、引用中にある"fuel"なのである。

I have here sent you a sharp sword, yet as I suppose, well sheathed - If it shall please you to draw and to use it, the hand that sent it hath a heart to endure it, if a heart so free from ill meaning to any, and so full of good wishes to Your Honour, must needs *offer up all loves in a bloody sacrifice* and yield it poor self as a chief portion of *the host*. If I were born in effect to try the lot which was threatened to *Isaac*, but not intended, here I have begun with one part of his office, which was to carry the *fuel* wherein himself was to be *the oblation*.⁶⁰

"Christ's bloody sweat"で"a masse of fleshe and blood"がキリストの体として聖変化したのと同様、サウスウェルの身体も犠牲の"host"（ホスチア）として変容されて「神の痛みに基礎づけられた愛」を証したのである。上記引用部分は、彼が自らの詩"Christ's bloody sweat"を改めて註解したものと解釈することもできるだろう。この書簡を受け取ったセシルは、"if he longed for hanging so much, he might obtain it soon enough"と語ったと言われるが、⁶¹サウスウェルのこの願いもすぐには聞き入れられず、彼は長引く殉教にあと2年苦しむこととなる。1595年2月18日(O.S.)、サウスウェルは、公判のためにニューゲート監獄へ移送、⁶²1595年2月28日タイバーンで処刑される。静かな死であったという。処刑後、ロンドン橋に首を、ロンドンの4つの門に切断された四肢が晒されて⁶³彼の英国宣教は幕を閉じる。

サウスウェルが詩った神の愛は、書くことを許されなかった獄中生活では、サウスウェル自身の「身体」に書かれて成就したのであり、また、彼の詩は、カトリック殉教者の言行録とともに、迫害を忍ぶカトリック共同体に読み継がれて、痛みを分かち合う共同体の「身体」にも刻まれて、生きられ、「神の痛み」に基礎づけられた愛を証したのであるといえよう。

註

1. Geoffrey F. Nuttall, "The English Martyrs 1535-1680: A Statistical Review," *Journal of Ecclesiastical History* 22(1971) 193.
2. Janelle 32.
3. Janelle 38.
4. Delvin 55.
5. Janelle 28.
6. Delvin 66. この信心会については、O'Malley 196, 197-199, 220, 226を参照。マリア信心会は、イエズス会の運営する教育機関に設置され、毎日のミサ、毎週の告解、毎月の聖体拝領と、毎日30分の黙想で、イエズス会靈性の養成に資した。いわば修道会の第三会に近い性格のもので、この信心会からイエズス会に入会した者も多かったという。
7. Delvin 47-50, 64-78, 92. ローマ英国学寮での混乱については、Williams, *The Venerable English College, Rome* 16-21, 23-24を参照。
8. Janelle, 37.
9. Delvin, 105.
10. Delvin 97-98: Janelle 36, 38. *State Papers, Dom Eliz.* vol. cxci n. 35.
11. "Saint Peters Complaint" ll. 91-96, *Poems* 78.
12. Delvin 214-219.
13. Janelle, 40.
14. Delvin, 124-127. Janelle 46-47.
15. イエズス会総長Claudio Aquaviva宛て1586年12月21日付け書簡。CRS 5, 313.
16. "Saint Peters Complaint" ll. 157-162, *Poems*, 80.
17. イエズス会総長Claudio Aquaviva宛て1586年12月21日付け書簡。CRS 5, 313-314.
18. 吉田幸子 『サウスウェルとクラッシュオーバーピューリタニズムとカトリシズムの美意識-』(アポロン社、1986年) 56.
19. "Saint Peters Complaint" ll. 73-78, 83-86. *Poems* 78. サウスウェルの詩における死と殉教、特に生への執着については、吉田43-64を参照。
20. 吉田 57.
21. Delvin 122.
22. Delvin 172.
23. CRS 5, 150-165.
24. Delvin 162-178.
25. Patrick McGrath, "Bloody Questions Reconsidered," *Recusant History* 20 (1991) 305-319.
26. Delvin 210-211.
27. CRS 5, 178.
28. イエズス会総長Claudio Aquaviva宛て1590年3月8日付け書簡。英訳は、*Rambler*, 1857, i, 104. Christopher Bayles拷問の許可申請書には、トップクリフの名前が残っている。Record Office, *Dom. Eliz.*, ccxxx, n. 57. cited in CRS 5, 178-179.
29. イエズス会総長Claudio Aquaviva宛て1590年3月8日付け書簡。英訳は、*Rambler*, 1857, i, 105.
30. 奥村一郎『主とともに』(女子パウロ会、1975年) 29.
31. 北森嘉蔵『神の痛みの神学』(新教出版社、1958年) 20.
32. "The Proclamation of 1591" in Robert Southwell, *An Humble Supplication to Her Maiestie.* ed. by R.C. Bald (Cambridge: Cambridge University Press, 1953) 63-65.
33. Robert Southwell, *An Humble Supplication to Her Maiestie.* ed. by R.C. Bald (Cambridge: Cambridge University Press, 1953) 1. 以下Southwell, *Humble Supplication* と略す。
34. Southwell, *Humble Supplication* 33-34.
35. Patrick McGrath and John Rowe, "The Imprisonment of Catholics for Religion under Elizabeth I," *Recusant History* 20 (1991) 415-435.
36. Hanson 65.
37. Delvin 195
38. 北森 129.
39. R.C. Bald, "Appendix III," in *An Humble Supplication to Her Maiestie.* ed. by R.C. Bald (Cambridge: Cambridge University Press, 1953) 74-75. R.C. Bald, "Introduction," in *An Humble Supplication to Her Maiestie.* ed. by R.C. Bald (Cambridge: Cambridge University Press, 1953) xxii.
40. 北森 150.
41. Southwell, *Humble Supplication* 43-44.
42. Delvin 275.
43. Delvin, 276.

44. Delvin, 311-312, Janelle 77.
45. Nancy Pollard Brown, "General Introduction," in *Two Letters and Short Rules of a Good life* ed. by Nancy Pollard Brown (Charlottesville, VA: The University Press of Virginia, 1973) xvi-xvii.
46. Janelle 55, 65.
47. Janelle 66.
48. Janelle 68.
49. Richard VersteganよりRobert Parsons1592年8月3日付け書簡。CRS 5, 212. Janelle, 67.
50. "Leake's Relation of the Martyrdom of Father Southwell," in CRS 5, 335. Janelle, 80. Delvin 310.
51. Delvin, 285-287.
52. John Gerard: *The Autobiography of an Elizabethan*. trans. by Philip Caraman (London: Longmans, Green and Co., 1951) 109-110.
53. Delvin, 286.
54. Delvin, 294.
55. *Garnet's Italian Letter*, p. 117^a, §2. Janelle, 66-67. Delvin, 288.
56. "Decease release" ll. 1-8, Poems, 47.
57. 北森 72-73. 北森も、アブラハムの犠牲に、神の痛みへの奉仕の原型を見ている。同書、68-71.
58. Robert Southwell, "Letter to Sir Robert Cecil" in *Two Letters and Short Rules of a Good Life*. ed. by Nancy Pollard Brown (Charlottesville, VA: The University Press of Virginia, 1973) 82. 以下、Southwell, "Letter to Sir Robert Cecil"と略す。
59. Southwell, "Letter to Sir Robert Cecil" 85.
60. Southwell, "Letter to Sir Robert Cecil"83-84. Ronald J. Corthell, "The Secrecy of man': Recusant Discourse and the Elizabethan Subject," *English Literary Renaissance* 19 (1989) 280もまたこの箇所注目している。
61. Janelle 72. Nancy Pollard Brown, "General Introduction," in *Two Letters and Short Rules of a Good Life*. ed. by Nancy Pollard Brown (Charlottesville, VA: The University Press of Virginia, 1973) xl.
62. Janelle 72.
63. Janelle, 91. Delvin 318-324.

(平成12年3月18日受理)